

GR
白雲峯

とり
お

31

昭和49年7月1日

鳥居観音

表紙観音瀧ノ説明

鳥居観音より北方約五百米に、高さ二十米、幅五米の雄大な美しい瀧があります。瀧上にブロンズ製の聖観音座像(高さ二米半の桐江先生作)が奉安されています。夏はこの瀧で行者が行をしたり涼を求める人でにぎわいます。春は新緑とつじ等の花にうつくしく、秋は紅葉にいろどられます。この谷の奥はハイキングに好適の幽すい境です。

と り る 第 31 号 目 次

表紙	観音瀧	
道光禪師御法話(其の十四)	………	一
インドネシアの旅(其の五)桐江	………	五
西遊記(其二十六)岡部千三	………	八
田舎医者(其の十四)見川鯛山	………	十四
寄進者芳名	………	十七
鳥居観音だより	………	十七
春季例大祭		
薬師如来外開眼式		
撮影会		
つじまつり		
裏表紙	夏の行事ご案内	



道光禪師
（故高階瓏仙猊下）
御法話

（其の十四）

仏心のめざめ

人命の尊重、福祉施設の完備、教育の刷新、教化の徹底から、家庭の平和に至るまで、それぞれ国民の努力精進によって、実現していかねばならない問題が多くありますが、その根本は人間形成の問題に帰着すると考えられます。しかも、その人間の形成は、その指導根本原理として、正しい宗教がなければなりません。今日の世相をかえり見て、痛切にこのことが感じられます。

四、宗教の目的

宗教はなにを目的とするか、なんのために存在するのか、これはあきらかに、現代の知性のもつ懷疑の一つであろうと思われれます。社会一般の人の眼に

つきやすい宗教、ことに、新興宗教といわれるもの
の多くは、あるいは病気をなおし、あるいは災厄を
予言し、加持祈禱をもっぱらにするので、これが宗
教の実体のような観すら与えています。もちろん、
これらのこともたしかに宗教に附帯する現象には相
違ないのですが、真の宗教の本質ではありません。
卑俗な治病や、息災や、荒唐無稽な富貴繁栄の欲望
をかり立てるようなことが、真正の宗教であるなら
ば、それこそ全く宗教とは阿片に過ぎないのであり
ます。

真実の宗教的要求というものは、決してそんな目
の前の欲望を、満たすていどのものではなく、日常
生活、現実の世界を深く突きつめて、現実的にも、
真実の生活を求めようとするところにあります。そ
れがすなわち宗教心といわれるものであります。こ
ころみに、われわれの朝から晩までの生活を、よく
よく反省して考えると、その根底には大層な矛盾が
あり、確乎不動の根拠の上に、立っていない不安な
自分というものを発見することがあります。

ところが一般には、深くそれを気にもとめず、矛盾を感じても、いい加減にごまかしています。それがつもりつもって、二進も三進もならず、苦しいときの神だのみで、似て非なる迷信のとりこになるのであります。

真に目ざめた人であるならば、目前の享楽や名利に動かされず、世相の無常を觀じ、日常の行為を反省し、あるいは罪業をさん悔（仏あるいは、長老にむかって告白し、さばきをうけること）して、はじめて真実の世界、解脱の世界、清淨無垢（清らかな、とらわれなき）な世界をあこがれる心がおこるはずであります。

このところを、道元禪師は

「仏道を習うは自己を習うなり」

と仰せられ、さらに

「自己を習うは自己を忘るるなり」

とお示しになっています。自己を忘るるとは、執われている自我を解脱することであり、解脱とは、文字通り、ほどき、ぬぐいとらということ、し

ばられているなわを解き、着ている窮屈な着物を脱ぐように、自我という我執のそくばくから自由になり、本来の生命、面目が自在にはたらけるといふことです。

そのそくばくには、肉体上のものもあれば、精神上のものもあります。世間には義理とか、人情にばられて、つまらぬことの羽目に、苦しんで泣く人もあり、自分の心で自分をしばって浮かびかねている人もあります。精神すい弱だの、ヒステリーなど、はもちろんそれでありますが、世に病氣という人の五割ぐらゐは、自分で自分を病氣にして苦しんでいる、いわゆる、はからい心が原因だといわれています。

要するに、事実が、空想か妄想かに囚われて、我執にしばられて、苦しみ悩んでいるのであります。が、そのなかでも、人生の最大とも、根源ともいふべき苦悩は、死生の問題であります。この死生の問題からみれば、その他の人生問題は小さなもので、すべて生より死にいたる。中間のできごとに過ぎな

いのでありまして、仏教はとくにこの根本問題に向かつて解決を与え、大安心を確立するのを目的とする宗教であります。

五、仏のおんいのち

その大安心の立場を、仏教の専門語で、涅槃といえます。すなわち、不生不滅の真理と合一するとこゝろに、展開する心境であります。そこからわれわれの理想境である。慈悲と平和の世界も実現されるので、この不生不滅の涅槃こそ、宇宙の生命であつて、やがてそれがわれわれの無限につづく不滅の本生命なのであります。

良寛和尚が、越後の国上山に住んでいたとき、ひとりの老人が訪ねてきて、延命の祈禱をしてくれと頼みました。早速承知して袈裟をつけて、ご本尊さまの前で、祈禱のお経を読みはじめましたが、「さて」といって、老人をかえり見て話しかけました。

「いったい、お前さんは、いくつまで生きたいのか」

「そうですね、八十ぐらいにお願いいたしましうか」

「そうか、それでよいのか、仏さまは正直だから、八十といえはその年の大晦日には、まちがいなくお迎えにこられるが、それをご承知か」

「いや、八十と申しても、そうキチンとは困ります。せめて八十一のお正月でもすましてから」

「なに、八十一じゃと、それでよいか」

「さよう、それではもう五年も延ばしていただきましょうか」

「それではほんとうによいか」

「じゃあ、きまりよく百までお願いします」

と、いうと、良寛和尚、大喝一声、……

「馬鹿ものめ、仏教の祈禱というものは、そんなケチなものではない。限りある生命を、限らない生命にして、大安心を得させることだ。」

と、生死即涅槃（有限即涅槃）の道理を説いて、老人を安心させたという逸話があります。

また、黄檗禅宗に、念仏独湛という和尚がいて、

坐禅をするとき、いつも念仏を唱えていました。あ
る人が和尚に、

「あなたは、今年いくつになりましたか」

と、きくと、

「あみださまと同じ年齢だ」

と、応えました。

「それでは、あみださまは、おいくつですか」

と、きくと

「わしと同じ年じゃ」

と 答えたといいますが、これは確かにおもしろ
い。

たずねる方は、有限の生命の数をきくのですが、
答える方では無限の命、不生不滅の本生命をこたえ
ているのであります。

元来、阿弥陀仏とは、梵語のアミターバ（無量光
仏）、アミターユス（無量寿仏）で、生命の本源に
名づけたもので、それを仏といひ如来と申すので、
われわれの生命は、このおんいのちにつながって
るのであります。

わが道元禅師も、正法眼蔵の生死の巻に、

「生死はすなわち仏のおんいのちなり、これをい
といすとすれば、仏のおん命を失わんとするな
り」

と、示され、また

「日日の生命をなおざりにせず、私のためにつ
いやさないように心がけよ」

と人命の尊重についても、深い宗教的な信仰を、持
つように教えておられます。

六、禅と本性の徹見

悟ってみればどんなものかと、よく聞かれます
が、そこは悟った人でなければ分かりません。坐禅
をして悟りを開くと、人格が向上するとか、胆力が
すわるとか、あるいはひょうたんから駒でもとび出
すような、活作略ができるとかいいますが、これら
も全くのいつわりとは申されずまい。悟りを開け
ば、玲瓏、玉のような人格も得られましようし、斗
りの如き胆っ玉も養成されましよう。（以下次号）



インドネシアの旅

(其の五)

八十三翁

桐江

ジャンゲルの植物園

前号に乗せた、見ごたえのあつたトーケシア博物館見学後直ちに一時間山に登ると、大植物園に到着致します。

植物園の案内者は日本語が出来説明も中々ニューモアで、此の松、檜やこの川の魚は日本から来たものだなど興味深く、愉快な見物が出来ました。

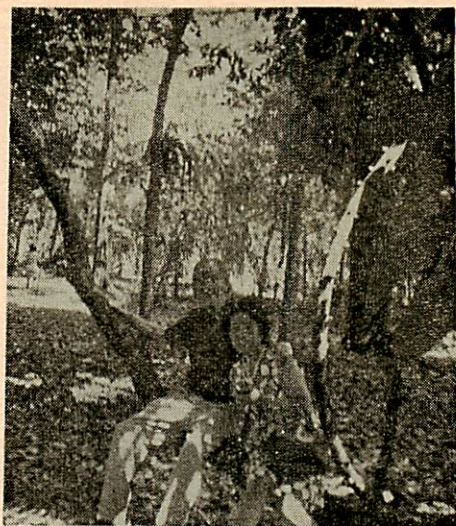
公園の中を自動車で見物するのに二時間余もかかりました。昼なお暗き鬱蒼たるジャングルに入り



蔓が大木から大木に渡り歩いて居る

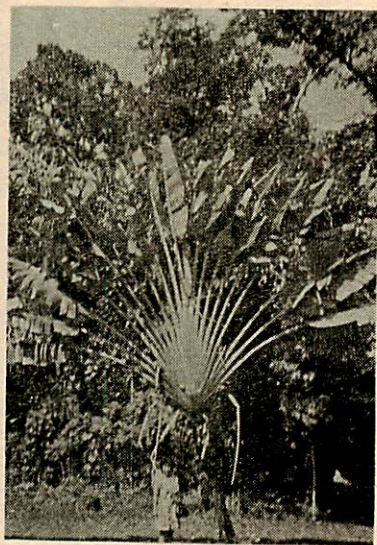
ますと、蔓の根本は直径一米もあるのがあるのに先づ驚きます。そして其の蔓は蜘蛛の巣のように老樹

にからまっていて、ターザンかゴリラが出て来そうな錯覚をおこさせます。



大きな蔓にブランコしている私と娘

此の公園には色とりどりの美しく珍しい熱帯の花が咲きみだれておって低徊去りがたく、と云うほどでした。珍しい果物も多いので沢山のカラー写真をとりましたが、黒だけでは感じが出ないので掲載は残念乍ら略します。椰子園も広大な面積には数



扇椰子

百種類の珍樹があり見事なものです。

此の公園には、羽が一米もあるかと思われるような大きな蝙蝠の大群が、ジャングルの上を飛んでいます。この蝙蝠は、昼間飛ぶと云う珍しい種類でして近づいたら写真を取ろうと、さんざんねらっていたのですが、だんだん遠くなり、写真が取れず残念でした。

スカルノ大統領の別荘を右に見て、出口に来た時は已に午後二時半を過ぎてしまうほど見ごたえがありました。是から頂上の火山に登って昼食にすると

云うスケジュールなのですが、頂上火山迄まだ二時間もかかるとの事で空腹と帰宅が夜になるとの事で残念乍ら、中止して道端のきたない食堂に、こわごわ入ってどんなものを出されるかと、心配していました処、珍らしい純粹の、ジャワ島料理のおいしかった事、空腹のためばかりではなかったと今でも忘れられません。今夜は、インドネシアにお別れなので、踊りを見ながらの野外食堂で、珍味に舌づゝみをうって、楽しい晩餐会でした。

七月二十三日（八日目）ジャカルタから飛行機でインドネシアにおわかれして、シンガポールに着き午後中央にある山頂の公園に登りました。景色は実に美しいのですが、赤道直下の熱さで閉口しました。それに以前の旅行で心痛む、大東亜戦の疵痕があまり多いのを見ておりますので、植物園の見物だけでホテルで休養しました。

植物園の蘭はさすがに美事で殊に数十本のくちた老木に色々の美しい蘭が、やどり木の様に咲き乱れて居るのが見ごたえがありました。

夜はマレイ式の面白い建築の食堂に行きましたがペラポーに辛くて閉口しました。娘達は焼鳥を二十串以上も食ったろうと、今だに話が出る度びに怒っております。

舞台では現地人の結婚式的一幕がありまして、新郎新婦の手に水をかけると珍しいおみやげをくれるので客は皆舞台上に登りますが、踊子にそこぞつかまり、皆踊らされるのが愉快でした。

そして二十四日夕方羽田に着き、出迎えの者達が心配した老夫婦の元気な顔を見て一同心から喜んでくれました。

バリ島の飛行機遭難

去る四月に、ジャンボ機がバリ島の山嶽に墜落して全員死亡と云う悲惨事がありました。私は、バリ島の山頂のキンタマニー火山に登りました時峨々たる山脈を見ているだけに遭難現場が峻に浮び、やるせない気持ちで黙禱して遭難者の御冥福をお祈り致しております。



西遊記

(其の二六)

岡部千三

悟空はそのま法のなわをすると、とり出してす早く銀角をめぐらして、えいっと、なげつけた。うまくなげたつもりなのわは、どうしたことか、ぼらりと下におちて、とどかなかつた。それと云うのも悟空は、そのじゅもんとやらを知らないのだから、どうしようもない。せつかくのま法のなわも、ただのなわとかわりがない。

銀角は、おちたそのま法のなわを、ひろいあげると、じゅもんをちゃんと知っているのだから、すぐさまそれをとなえながら悟空めがけてなわをなげかえしたからたまらない。

なわは、ぐる、ぐる、ぐるっと、悟空のからだにたんで行ったのかと思うと、悟空のからだにまぎついで、ぎゅっとしめつけた。

「どうだ。まいったか。」

銀角はそう云いながら悟空のもつていた、ま法のひょうたんをとりあげ、とりあげ、とくひになつて金角のそばへひたつて行つた。

「どうだ、この通りだ、ま法のなわも、ま法のひょうたんも、こつちのものになつたぞ」

「銀角、えらいぞ、よくやった、……。こやつをおくへつないでおけ。こつちでゆつくりと、お祝いをするとうしよう。」

悟空を、おくへほうりこんで、金角と銀角は、やがて酒もりをはじめた。

悟空は、ひとりになると、やっと心もおちついて何やら口の中で一人ごとを云いながら、耳から如意棒をとりだして、それをやすりにつかつた。ごしごしと、なわをこすつてぶつりと切つた。そのかわりに、胸の毛を一本ぬきとつて、にせものの悟空をつくつた。もう一本の毛をぬくと、それはにせもののなわにして、そこへなげておいた。

悟空はへやからそつと外へ出ると、大声でどなり

散らした。

「やい、金角でてこい。孫悟空の弟の悟空孫が、兄のかたきをうちまいったぞ。」

金角と銀角はその声をきくと、

「何 悟空孫というやつがきたと、孫悟空に、そんなのがいたのか。よしめんどうだ。ひょうたんへいれてしまおう。」

よしと云つて銀角が、ひょうたんを悟空のほうにむけて、

「おい、悟空孫。」

呼ばれた悟空は。ついうっかりして、返事をしたからたまらない。すうっと、ひょうたんの中へすいこまれてしまった。しばらくして、悟空は、ひょうたんの中のどこかに、あたまをぶつつけて、気がついた。

「あつ、いけねえ、やられたか。」

「どうだ、悟空孫。この宝のひょうたんは、お前を、やがて水にしてしまふのだ。」

銀角が、ひょうたんをうごかすたびに、悟空孫は

その中でごろごろところがって、からだじゅうがこぶだらけになったので、いたくてたまらない。そのうちに、

「た、たいへんだ、からだがとけてきたア」

と、わざと、いかにもかなしそうな声で、しくしくはじめた。

「ははあ、いきみだ。ここでゆっくり見物してやろう。」

銀角は、ひょうたんのふたをあけて見た。

そのとき悟空は、す早く、一本の毛でにせものの悟空をつくり、自分は虫になって、そっと、ひょうたんの口からはいだした。

「まだとけないな。あわてることもない。ゆっくりまつとしよう。」

銀角は、ま法のひょうたんをそこにおいて、金角といっしょに酒のみはじめた。

悟空は、ひょうたんにせものをつくり、本ものの方を持って、こっそりと、ほら穴の外へとでた。

「金角、銀角、あとでおどろくな。」と、ふり返り

ながらにやりわらった。

ほら穴の入口に来て、仁王立ちになった悟空は、もう得意である。

「やい、金角、銀角、でてこい。孫悟空の弟の悟空孫の、そのまた弟の空悟孫が、兄たちのかたきをうちにまいった。」と、中へきこえるように。大音声で呼びかけた。

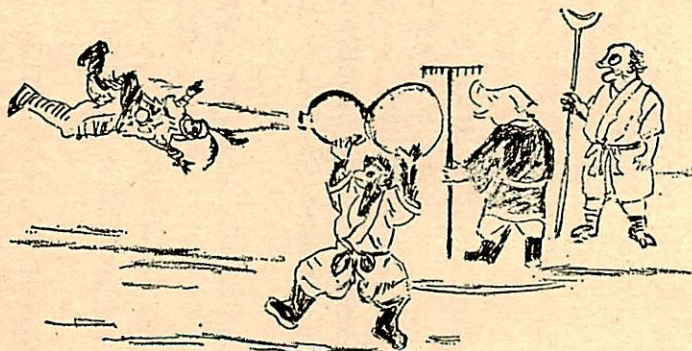
火のでるうちわ

金角と銀角は酒をのんで、調子にのっていたところへ、へんなやつが来たので、顔を見あわせた。

「あれっ、悟空孫の弟の空悟孫と云ったようだなにたような名もあるもだ、でも、兄の悟空に勝ったおれたちだから、弟の弟などはなんのことないさ、ちよいとかたづけてやろう。」

「銀角。」と悟空が大きな声で、よんだ。

「おう。」と思わず銀角がへんじをすすると、すうっと、ひょうたんの中にすいこまれてしまった。



銀角は悟空のひょうたんにすいこまれた

「なるほど。これやあ、おもしろいひょうたんだ
おれがはいるのはまっぴらだが、ひとをすいこませ
るのは、ゆかいだ。」

悟空は、ひょうたんをぼんぼんたたいて、でられ
ないように、しっかりと、ふたをした。

見ていた金角のけらいが、びっくりして、ほら穴
へかけこんで行った。

「金角さま、金角さま、た、たいへんです。銀角
さまが、空悟孫のひょうたんに、すいこまれてしま
いました。」

「なに、銀角がひょうたんにすいこまれたとな、
そんなばかなことがあるかい。」

「ないと云われたって、ほんとのことです。」

「そうか。かわいそうな銀角、おまえがいなくな
ると、おれはこれからどうすればいいか、こまった
ことになったなァ。」

と云って、金角は、泣きだした。すると、

「はははは、これは、これは、またおもしろくな
ってきたぞ。」と、とつぜん、そばで、わらったもの

があった。

その声に金角は、あたりをきよるきよるとみまわ
し!!

「やつ、おまえは……………」

金角は、おどろいて天井を見上げて、おどろいた
そこには、八戒が、がんじがらめにぐるぐるとしば
られて、ちょうど、くものようにつるされていた。

「金角、おまえでもかなしいことがあるのかい。」

おれは、おかしくってしかたがないぞ、おまえたち
にはわかるまいが、悟空孫も、空悟孫も、みんな悟
空のばけものだ。そんなへんな名まえのものがこの
世にいるものかい。うまくだまされたおまえらがば
かなのよ。銀角をかわいそうだと思ふなら、お経を
あげてごちそうをそなえてやれ、もし銀角がたべな
いなら、そのかわりに、おれたちがたべてやるぞ。」
八戒は、べらべらとしゃべりだした。金角は、ぶ
りぶりおこって立ちあがった。

「よくしゃべる口をもってるなァ、その口を、ひ
きさいてやるぞ……………いいか。」

おそろしい顔で、八戒のほうへちかづいたとき、入口で、また悟空の声が出た。

「おーい、これ金角、でてこい。」

「悟空か、よくぞまいったな、こんどと云うこんどはにがさぬぞ。」

金角は、まほうのうちわのばしょう扇をえりにさし、七星剣をぬきはなつて、おそろしいいきおいでほら穴をかけた。そして悟空をめがけて、まっふたつになれと、切りつけた。そのいのちがけの金角の剣のするどさに、悟空はだんだんおいこまれたが、あいてに気づかれぬように、足の毛をひとにぎりぬきとると、ぷっといきをふきかけると、たちまちおおぜいの小ざるとなつて、きいきいと白い歯をむきだして、さけびながら金角にかみついていた。どちらをむいても、小ざるの敵でいっぱい、金角は、にげることもどうすることもできないありさまだ。

あわてて、剣を左手にもちかえるなり、えりもとにさしていた。ばしょう扇をとつて、さつとあおぎ

たてると、ふしぎなことに、みるみるうちに、そこここに火がもえあがり、それが風にあおられて、一面の火の海にかわつていった。

火は悟空のからだにも、ふきつけていった。

「あ、あつい、あつい、これはたまらない毛がやけたら、たまらない、はだかの悟空になつちまうぞ。」

小ざるをもとの毛におさめて、一びきだけ身がわりにのこし、やつとのもので遠くへにげた。

「金角め、気がつかないな。このまに……おししようさまをおたすけしよう。」

悟空は、れんげ洞へひきかえし、金角のけらいどもを、かたっぱしからたいじしてしまった。

けれども、そこへ金角がもどってきたので、みつけられてはめんどうだと、わざとすがたをかくしていた。

そんなことは知らない金角。

「銀角もやられた。けらいどももこのさまでは、もはやたたかう力もなくなった。これからどうしよ

うな。」

からだをなげだして、ひとりごとを云った。たたいのつかれがでたのか、やがて、いつのまにか死んだようにねむりこんでいた。

「うまくいったぞ、と、悟空は、こっそり、ぬき足さし足、金角のそばへにじりよって、そーっと、ばしょう扇をとろうとした。

すると、金角が、ぱあっと目をさまして、
「どろぼう悟空、こらまてっ。」と、七星剣をふりあげて、切りつけてきた。

それが、悟空のはかりごとで、にげるとみせて、外へおびきだしておいて、ぱっとすがたをけしてしまった。ほら穴にもどった悟空は金角がうるうるしているまに、しっかりと入口の戸をしめてから、三蔵法師のなわをとぎ、八戒と悟浄もたすけることができた。

(以下次号)

「観音様のお守りに救われて」

私のせがれが、ふとしたことから、東京都内の街中で、自動車の事故にありました。車は大破しましたが、乗っていたせがれはけが、一ついたしませんので、全く不思議でした。車内には観音様のお守りがありました。観音様のご加護を受けたことを心から信じ御礼のことばといたします。

東京麻府 笠間はな

白雲山 鳥居観音様

原	稿	募	集
			とりぬ(第三十二号)に掲載します。
			当山に参拝されてのご感想
			信仰から救われた事例
			俳句、短歌、詩等



田舎医者(其の十一)

見川 鯛山

挿絵 おおば比呂司

祝賀会(つゞき)

その受付で、役場の書記が私の胸に大きな造花をかざりつけ、ビン詰の酒と、弁当をくれた。まだほかほかとあたたかい弁当だった。

私は来賓席へ案内され、その末席の椅子に腰をかけた。会場は強いベンキの匂いと、人いきれで息ぐるしかったが。窓を開けると、すぐそここの桃の花の中で、鶯がいい声で鳴いた。

とつくに、演説は始まっていた。演壇の男は婦人服みたいな派手な柄の洋服こそ着ているが、四角い真黒な顔が大きくて醜い男だった。

だがその喋りかたは、実に堂々と立派で、満員の会場をすっかり威圧していた。男はその方がいいの

だ。

感心して見ていたら、書記がソッと、私に教えてくれた。

「あのかた、県会議員さんで、栃木県婦人同盟会長の垂水先生です。本県での名流夫人です。」

「おんなかね、あの人!!」

思わず私は云った。

「さようです、そしてあの方、北那須市の駅弁会社の女社長さんです。きょうのお弁当はあの方が全部ご寄付くださったんですハイ」と書記が涙ぐみながらお辞儀をした。

「いい人だ、私は彼女の演説を聞こう。」

だが、会場はガヤガヤとうるさかった。

赤ん坊が泣くと、おかみさんが胸をあけてその口に

乳房を突っこみ、走り廻る子供たちを土方のような声で叱った。そして親爺どもは、もう酔っぱらって空缶の灰皿をキセルの雁首でひっぱたき、二合びんをラッパ呑みしてめいめい勝手に祝賀の宴を始めていた。

だから、垂水先生は負けずに怒鳴った。

「若い世代と古い世代の中間にあつて、いつも良き助言者であらねばならんのが、これすなわち我々母親であり妻であらねばならんのである。アメリカへ渡米して、第一番に私が感じたことは、あちらの農村主婦たちがそれぞれのレジャーを楽しみ、知性とユーモアにあふれた生活をエンジョイしておることである。それにひきかえ、日本の農村婦人はどうか!! いささかの知性もユーモアもないではないか。これでよいのか!! 私を声を大にして断固として叫ぶ、このままでよいのか!!」

先生がふるいたってテーブルを叩くと、……いっせいに赤ん坊が泣きだした。たぶん虫が起きたのである。

するとまた先生が怒鳴った。

「演説中ですぞ!! 赤ちゃんを連れ去りなさい!! 朝からの私の演説ももうじき終りに近づきつつありますぞ、静しゆくに!! みなさんどうぞ静しゆくにしなさい!!」

命令がくだると、へべれけの親爺どもさえ先生の電気にうたれ、故障した活動写真のようにびたっとその動きをとめ、赤ん坊はとっくにひきつけを起こして泣きやんでいた。

会場が林のように静かになって、再び先生の演説が続いた。すると幾百のお客さんたちは、誰も彼もすっかり精根がつき果てて、力なく肩をおとし、ため息ばかりついていた。

ふと、向こう側の来賓席から、村長が私に何やら合図を送りはじめた。彼は垂水先生に見つからぬようにそっと彼女を指さし、その手を忙しく振りまわす。最後に金歯だらけの自分の口をバクバクさせるのだ。そのしぐさを、私が見かねんに読みとるとそれは実にひどいことを云っていた。

私に、壇の上へ登って行って垂水先生の頬つべたを撲りつけ、引きずりおろしてから噛みつけ!! と云うのだ。

「まさかそんなこと、私にアとても出来アしない」

と、こっちも手を振って合図を送ると、村長が書記に耳打ちをして私のところへ伝令によこした。

「村長さんは、あなたに垂水先生の演説のあとでひとこと祝詞をのべていただきたいそうです。」

と、書記が意外なことを伝えるのだ。私は村長に渋い顔をしてみせて、いやだ!! と云った。するとまた、村長が手で十二時をしめし、二本の指を箸にして、パクパクと口へ持ってゆく、私にめしを食え!! と云うのだ。私はにこにこして、さっそく弁当の包みを解きはじめた。

その時、書記が再び、大いそぎで走ってきて私に告げた。

「弁当のことではありません。まだ食べては駄目です。村長さんは、あなたにさっきからこう合図な

さってんですよ。この演説のあと十二時のお昼までちょっとでもいいから何か喋るようになって……」

私はもう決して、村長とジュエスチャー遊びなんかしなからうと心にちかった。

時計を見ると、間もなく昼だった。そして垂水先生の演説はまだ続きそうである。

「さあて皆さん!! 以上のようにお話した次第であります、あまり簡単すぎておわかりにくい点もあること、思われますので、ここで皆さんのご質問にお答えしようと思っております。さあどなたでも結構です。」

と、先生がじろつと会場を見廻したが、質問はなかった。

「なければ次へ進みます。私は結論といたしまして、いかなる場合に於ても、皆様のよき代弁者たらんがために、次期県会にも立候補を決意しました。

垂水薫は皆様の公僕として、農村主婦の幸福のために、男性横暴に一戦をいどまんとする覚悟でおるのであります!!」

(以下次号)

◎ 薬師如来、日光、月光、菩薩

十二神将開眼式

四月二十三日、十一時三十分より救世大観音堂宇内に安置された。薬師如来、(二、五米)日光、月光菩薩(各一、五米)十二神将(各一、二米)等の開眼式が挙行されました。

導師は、春の例大祭と同じ三老師で、ご参列の方は広く彫刻界の先生や、恩師三木宗策先生の奥様、平沼杉之助様関係の百三十名等多数の善男善女の御参列で盛大でした。

其の為め開眼された尊像の御まなざしはいよいよ輝いて、その尊厳は一層高まりました。

これら尊像はすべて檜の木彫で、生地そのままが生かされ、要所要所には金粉で彩色されたのが何とも云えない奥床しさに感じ入りました。

◎ 埼玉トヨペット撮影会

四月十四日十時に、鳥居観音下の名栗川の清流のほとりに、約三百名が集合して、たのしい、昼のバ

ーベキューの後、大観音近くモデル数名が配されて撮影が開始されました、山内はカメラマンで賑やかでした。

◎ さくらカラー 大塚カラー主催 大撮影会

四月二十八日、好天に恵まれて、撮影会にはまことにふさわしい日となり、遠く熊谷、上尾方面から観光バスを連ねて参加の人や、朝霞、川越、飯能からもくりこまれました。

モデルは、夏木レナ、水木洋子、水木麻妃、麻田未知、郷田ジュン、内田道子、後藤正子、八木優子の八嬢が見えました。

午前九時三十分、本堂前の広場集合、九時四十五分、開会には、主催者である鳥居観音、大塚カラーさくらカラーの関係者からあいさつが述べられ、大塚カラーの加藤宣伝課長の名司会にて、本日の運営進行について諸注意があり、本堂前の石段に立並ぶモデル八名の紹介の後、十時撮影開始……………

撮影に参加された多くのカメラマンは誰も彼も、

この道のベテランで、持っておられる写真機も高価なものばかりのようでした。

モデルさんは二人ずつに分かれて、所定の位置に配置されましたが、それに向ってレンズ口をいろいろの角度から、希望するポーズに向って切られるシャッターの音も、真剣そのものと同時に又たのしうでした。

撮影会は午後三時には無事終了しました。

この日は新緑と花がよいので、一般の来山と、行楽客で夕刻までにぎわいました。

◎ つつじまつり(四月一日～五月末日)

四月一日からつつじまつりを開始しましたが、今年には気節が例年より十日もおくれましたので、早く来山された方は蕾のふくらみをごらんになる位で、お気の毒でした。

十日位、おくれましたので、五月に入つてようやく、ピンク、紅のつつじが咲きまして、つつじ祭りもいよいよ真盛りとなりました。

殊に四月末からのゴールデンウィークには天候にも恵まれたので、都心からのドライブの車と、バス等の参拝客で毎日賑いました。

◎ 花まつり

五月八日、毎年月おくれで、花まつりを実施しておりますが、今年は花の真盛りで、花まつりにふさわしい催でした。

花御堂もとりどりの花で飾り、天上を指さして立たれた、お釈迦様のお姿は三千年の歴史の中にいよいよ輝いて拝されました。

◎ 夏の行事のお知らせ

◎ 施飢鬼塔婆供養

七月十六日に執行されますので、先祖様や新盆の諸霊を御祭りするため御申込下さい。

この塔婆は供養の上救世大観音前の供養塔に納められ、大観音、阿弥陀様等に守られます。何卒この機会に御参加下さい。

◎ 流燈法要と盆踊りと花火大会

八月十六日の午后五時より本堂に於てご先祖様並に諸靈の流燈供養をいたしますので、お申込みください。尚当夜午後六時より名栗川に流燈しますが、その美観は格別です。

又花火打ち揚げ、五百発や盆踊り大会も広場に於て展開されますのでご参加ください。

救世大観音前にて



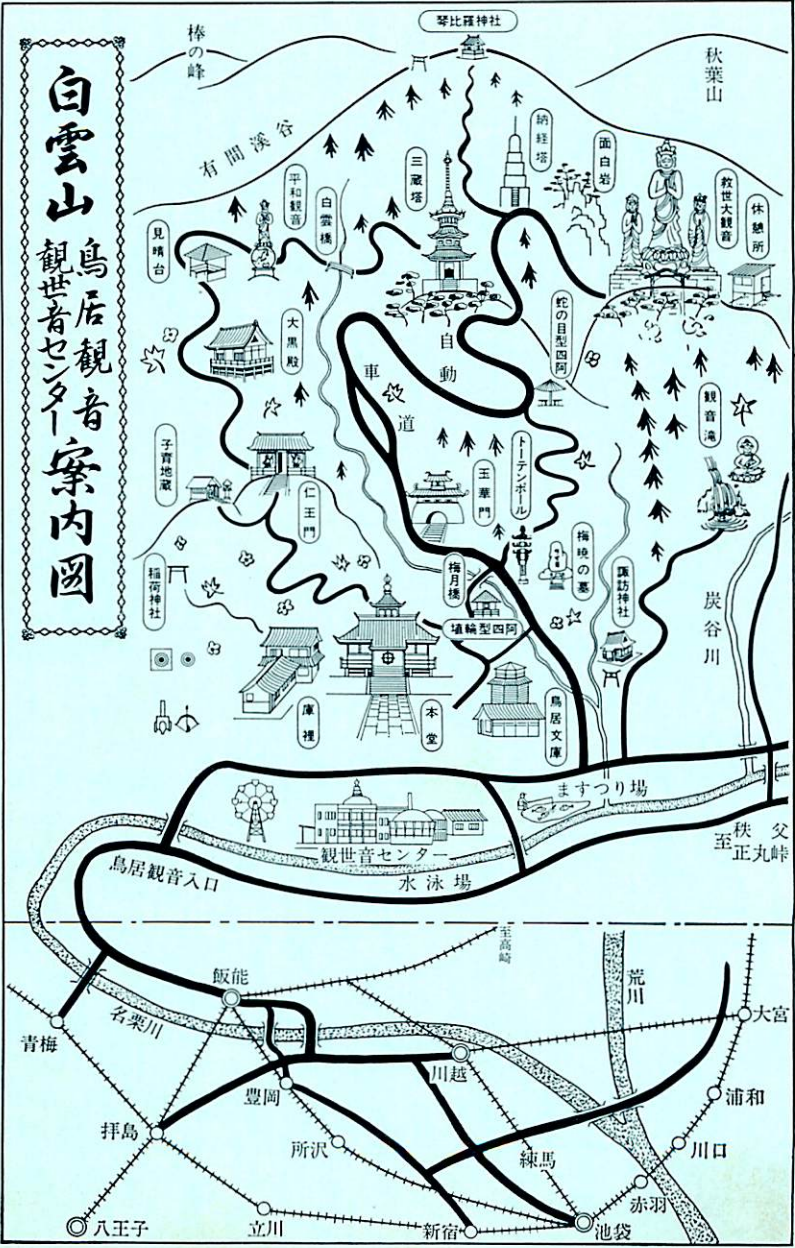
さくらカラー
大塚カラー 共催 鳥居観音撮影会作品



とりみ 第三十一号 発行日 昭和四十九年七月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
発行人
印刷所 浦和市仲町二一八―十五 武州印刷株式会社
発行所 鳥居観音電話〇四二九七〇四 名栗二七五番

白雲山

鳥居観音
観世者センター案内図



夏の行事ご案内

施 飢 鬼 の 行 事

- 7月16日 午後2時 救世大観音
供養塔婆は大観音堂宇近く万霊塔に立てて
供養します。お持ち帰りもできます。
- 供 養 料 小塔婆 1本 1,000円
大塔婆 1本 2,000円
- 申込期日 7月10日まで

流 灯 法 要

- 8月16日 午後 5時 本堂
- 法 要 料 1灯 1,000円
ご先祖様を始め諸霊の法要のため
- 申し込期日 8月10日まで

花火大会と盆踊り大会

- 流灯終了同時に開始
ご参拝かたがたおそろいでお越してください。
盆踊り参加自由 飛入り大かんげい。

秋 の 彼 岸 法 要

- 彼岸中 10時 法要 祈禱謹修します。

祈 禱 の 修 行

- 常時御申し込みにより執行します。
- 諸御申し込所 白雲山鳥居観音事務局